



広域の子どもたちに 多様な診療科で対応

四国こどもとおとなの医療センターの小児医療



NICUで電話対応する久保井医師。四国こどもとおとなの医療センターはNICUをはじめ、PICU(小児集中治療室)やMFICU(母体・胎児集中治療室)なども備えている

NICU(新生児集中治療室)の様子

香川県や地域の医療機関とも連携

子どもが病気にかかったとき、診察や治療が急がれるのは、子どもは大人に比べて免疫力が弱いからです。「子どもには余力がありません。特に新生児は悪い状態になるのが早いので、先手を打つようにオーバートリートメントしていきます」と説明するのは、四国こどもとおとなの医療センター(香川県善通寺市)で新生児内科医長を務める久保井徹医師です。

同センターは小児の専門病院を前身とするため、小児循環器や小児神経の内科、小児心臓血管や小児脳神経の外科など、内科系・外科系ともに細分化された多くの小児診療科を備えていることが特徴です。

「当院は24時間365日、3次救急まで対応しています」と特長を挙げるのは、小児科で小児感染症内科医長を務める岡田隆文医師です。「事故に遭った患児などに対応できる設備、体制も整え、香川県はもちろん、愛媛県東部、徳島県西部からさまざまな患児を受け入れ、治療後は地域の医療機関に返す形をとっています」と久保井医師は話します。

小児医療で重要になるのは、地域の医療機関との連携です。香川県は育児支援に積極的で、



久保井医師(右)と渡辺旭代看護師(左)。NICUで働く渡辺看護師は、「ネット情報などが溢れる中で迷うことも多いと思います。ちょっとでも困ったことがあれば、相談してください」と話す

通常“一県に一つ”とされる総合周産期母子医療センター(ハイリスクの妊産婦や胎児・新生児に対応)を県内に2施設も有しています。一つは四国こどもとおとなの医療センター内に、もう一つは香川大学医学部附属病院にあり、互いに協力して病床を有効活用しています。

病気以外の相談にものり、子育てを支援

子どもの急な発熱(P14参照)への対応も多い四国こどもとおとなの医療センターの救急外来では、医師や看護師が気づいたことを記す「気になるシート」を活用しています。こうした情報を院内の育児支援対策室に繋げ、さらに地域と保健・福祉の各機関と連携をとり、児童虐待の防止なども含めた子育て支援を行っています。

岡田医師は、「当院は親御さんが心配なときに頼れる病院です。“小児科医は子どもが病気になったとき診る人”というイメージがあるかもしれませんが、例えば“うちの子は多動じゃないか”など、病気以外のことでも何か不安があれば、気軽に相談してください。その科では答えられなくても、当院には多くのスペシャリストがおり、誰に尋ねればいいのかをお伝えできると思います」と語りかけます。



小児病棟で入院中の子どもの様子を確認する岡田医師(左)と藤本縁副看護師長(右)。「幼い子供たちにとって治療やケアが、できるだけマイナスの記憶として残らないよう心がけています」と藤本副看護師長

新しいアートが生まれる病院



昨年(2018年)から今年にかけて、リハビリセンター廊下に新しく描かれた2幅の点描画。四国こどもとおとなの医療センターは新築の設計段階からアートを取り入れた病院として知られ、建築後も新しいアートが次々に生まれている。

四国こどもとおとなの医療センター(香川県善通寺市)



許可病床数689床。成育医療(小児領域)と成人医療を二本柱に、高度な専門医療を提供すると同時に、ホスピタルアートを取り入れ、癒しの環境づくりを推進。地域ボランティアの協力を得て、さまざまな活動を展開している。